

「雪女」の“伝承”をめぐつて 口碑と文学作品

牧 野 陽 子

一、「雪女」の原話

人は物語をどのように語り伝えるのだろうか。物語が「語り伝えられた」とされるとき、「語り」とは、厳密に口承のみをさすのだろうか。それとも、書物もそこに介在するのか。

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の短編作品「雪女」（『怪談』、一九〇四年）の出典と伝承をめぐる問題は、そのような、語りと文学との関係について改めて考えさせる。それは民話とその採集にまつわる図式と先入観に深く関わっており、そうした図式が、ハーン研究という場に現れた、ひとつの興味深い事例とも思われるのである。

周知のように、ハーンの怪談作品の多くには、原話がある。「耳なし芳一」も、「むじな」も、日本の古い物語

「雪女」の“伝承”をめぐつて

「雪女」の「伝承」をめぐる

を、ハーンが語りなおしたものである。「再話」といわれるゆえんである。しかし、その「再話」の形は一律ではない。ハーンが何を原話として、そこにどの程度みずからの手を加えたかは、作品によって、まちまちである。あえて分類するとすれば、三つの部類に分けることができよう。

一、文学作品 ないし民話や伝承としてすでに文章化されているものを、ハーンが読み、英語に語りなおしたものの。「むじな」、「耳なし芳一」、「十六桜」、「青柳物語」、「和解」、「おしどり」などが代表的なものである。

原話は特定されている。

二、文字化されていない伝承や説話をハーンが聞いて、作品化したもの。

紀行文のなかに、土地で聞いた話、土地にまつわるエピソードとして挿入されている場合が多く、小泉セツがハーンに語ったとされる、「持田の百姓」の話、「鳥取の布団」の話などが知られる。原話をその細部にいたるまで特定することは難しい。

三、ある種のイメージ、ないしはアイディアとしてすでにあったテーマにそって、ハーン自身が日本を舞台にして、ほとんど創作したもの。ハーンが用いた日本の話は、原話というよりは、創作のきつかけ、ヒントにすぎない。

この三つのうち、数としては一番多いのが、一のタイプ、つまり書籍や雑誌にすでに掲載されたテキストを素材にして、英語の短編作品に仕立てたものだろう。もちろん、ほとんど翻訳紹介に近いものから、大幅に手を入れて換骨奪胎したもので、「再話」の程度には差がある。だが、原話がはっきりしているため、原話とハーン

の再話とを比べてみる事ができ、ときに、その違いが興味深い文学の話題となりうるのである。

では、「雪女」はどつなのか。ハーンは『怪談』の序文のなかで、家に入りしていた百姓から雪女伝説について聞いたと記している。上の分類でいえば「雪女」は、まずは、二のタイプということになる。

だが、ここで、ハーンが聞いたという話の内容までは言及していないため、百姓が語ってきた元の話はどのようなものだったのだろうか、という疑問がでてくる。その話は、すでに何がしかの文献に記載されていたかもしれないし、また、ハーンが百姓から聞き取った時点で口碑だったとしても、民俗学者によつて、民話として採集されているかもしれないからである。そこで、様々な日本民話集をもとに、原話の詮索を試みることにする。

そして、これまでの研究からわかっているのは、ハーンの時代以前まで遡ろうとすると、それらしき話はみつからない、ということである。たとえば江戸後期の代表的な雪国生活風俗誌といふべき越後国塩沢の鈴木牧之著『北越雪譜』(天保十二年、一八四三年)などに雪女伝説の言及は見当たらない。今野圓輔『日本怪談集(妖怪編)』(社会思想社、一九八一)の「雪女」の項によれば、雪女の名称は雪娘、雪女郎、雪婆、雪降婆、シッケンケンなど色々だが、その伝説の形は、三種類ほどに分かれるらしい。第一が雪の精霊・化身として姿を現すものである。時には、直視すると死ぬという恐怖の要素が加味されている場合もあるが、大体が、雪の降り積もつた後や吹雪の夜に雪の精霊である白い女の姿をただ遠くから見かけるといふ話で、自然の脅威への畏敬を宿した素朴な雪鬼、雪神信仰が変化していったものとされている。次に、吹雪で行き倒れになった者の靈魂が出てくる幽霊話風のもの、そして案外多いのが笑い話化したものであり、風呂に入るのを嫌がる嫁を無理やり入れたら、いつま

「雪女」の「伝承」をめぐって

でたつても出てこない、心配してのぞくと、あぶくになって浮いていた、とか、雪女を囲炉裏にあたらせたら溶けてしまったという類の話である。ハーン没後に刊行された柳田国男の『遠野物語』のなかにある雪女の伝承も同様のものである。

二十年まえの拙論「雪女」 世紀末「宿命の女」の変容⁽³⁾では、以上の考察をふまえて、調布の百姓の話も、このような各地に散在した雪女話と同じくらいに単純なものだったと考えた。そしてハーンの来日以来の「雪女」に関する言及をたどることで、ハーンの「雪女」は日本の素朴な伝承を核にしつつも、ハーンの想像力によって仕上げられたものであり、その中核にあるものとして、世紀末西洋の文芸のイメージを読みとろうとした。さきほどのハーンの再話文学の三つの形でいえば、三の部類に分類される。

もちろん私は、昭和に入ってから、ハーンの「雪女」にそっくりの話が信州地方で採集されていることも承知していた。いずれも、郷土の昔話として記されたもので、筋立てから登場人物の名前に至るまでそっくりである。これらの話をハーンの「雪女」の原話であるとみためて、叙述の細部にわたる比較を試みた中田賢治⁽⁴⁾『雪女』小考⁽⁵⁾（『へるん』一九号、昭和五七年）についても、脚注のなかで触れておいた。特に反論として本文中に挙げなかったのは、中田氏がとりあげた、瀬川拓男・松谷みよ子共編『日本の民話2 自然の精霊』（角川書店、昭和四八年）、『信濃の民話』編集委員会編『信濃の民話』（未来社、昭和四九年）のいずれもが、その聞き書きの時点でハーンの死後数十年も経た後だからである。民俗学者の今野氏は、ハーンの「雪女」そっくりのこれらの話について、先にあげた著作のなかで、「明白な原作者が忘れられてしまい、話だけが伝わり語られつつけている間にまるで土着してしまって、その地に伝承された世間噺、伝説あるいは昔話ふうに取りまぎれてしまう場合」であ

ろつと評しているが、ハーンの場合は、翻訳以外にも英語の授業の教材として、全国の旧制中学などで幅広く使用されてきたという事情もあり、昭和四八年にもなつて、「信濃の民話」として採集された「雪女」をハーンの原話と考えることはできないという前提にたつて、作品解釈を試みたのが拙論であつた。

二、六、四「雪女」論争“!? ”

遠田勝著『転生 する物語』 小泉八雲『怪談』の世界』（新曜社、二〇一一年）の第一部「旅するモチーフ小泉八雲と日本の民話」「雪女」を中心に「は、雪女の伝承をめぐる問題を論じたものである。ハーンの「雪女」という文学作品から、いくつかの段階をへて、松谷みよ子の民話「雪女」になり、さらには遠野の「昔話」になつたという、物語の「転生」のあとをたどろつとする論考である。

ただ、私は、遠田氏の論法にいくつかの疑問を抱いた。ハーンの商品が元になつて、松谷みよ子らの民話になつた、という結論に異論があるのではない。雪女の話がのつているさまざまな伝説集や教科書や児童書など多くの文献資料については、丹念に調べたものだと感じた。また松谷みよ子が民話風の童話を執筆するまでの事情や、遠野の鈴木サツの伝記的事実など、興味深く思った。しかし、私はこの論考における、結論にいたるまでの論の立て方に、いささか不審の念を持ったのである。

そのことを指摘し、事実関係を正しておきたい。著者（以下、『転生 する物語』の著者遠田氏のことをいう）の論が、厳しい言い方をすれば、一種の印象操作の上に成り立っているとみなせるからである。

「雪女」の「伝承」をめくつて

著者は、事実を一部隠すことによつて、全体として誤つた印象を読者に与え、その上で、その誤つた印象を覆してみせる、ということを行つた。つまり、「雪女」の出典に関して、ハーン研究者および民俗学者の見解をふせ、すでに了解されていることを隠したうえで、あたかも重大な新発見であるかのように、同じ方向の答えを提示したのである。そして、こつした印象操作の先に、著者の「雪女」解釈があり、さらには、ハーンの全体像が提示される。ここでこのことを問題とするのは、ただ単に事実を訂正するためだけではない。作品解釈とハーン研究の根本に関わつてくるのではないかと考えるからである。

では、何がどのように歪められたのか、具体的に示そう。

まず著者は、冒頭で、ハーンの「雪女」が日本古来の物語なのかどうか、「そんな基本的な質問にさえ、ハーン研究者の答えは分裂」(一)はじめに「四頁、以下、当該著書からの引用は、頁数のみを記す」してしていると述べ、「膠着してしまつた「雪女」の出典問題」(五)を解決し、「雪女」論争」に決着をつける、と記す。私は驚いた。「雪女」の出典について研究者の見解は分裂も膠着もしていないし、そもそもそんな「雪女」論争」のことなど、私は初耳だつたからである。

「原「雪女」をめぐる論争」というタイトルをたてた著者の問題提起を次に引用する。

ハーンの「雪女」が、たとえば白馬岳の雪女伝説のような口碑伝説に手をいれて小説化したものなのか、それともずいぶん、大胆な仮説のような気がするけれども、逆に、ハーンの「雪女」が、日本人に愛されて民間で語られるうちに、各地で口碑伝説化したものなのか、実は今もハーン研究者の間で根強い意見の対立があつ

て、一致した結論には達していない。今そのすべての論点の対立を見直す余裕がないので、それぞれを代表する意見をひとつだけ紹介しておく。まず前者の立場をとる村松真一の「ハーン」の「雪女」と原「雪女」から。(一九)(傍点筆者)

つまり、ハーンの「雪女」という作品の原話に関する二つの説が、それぞれ同じくらい有力な意見として拮抗していると著者は言うのである。さらには、日本の原話をハーンが再話したという村松の意見の方が穏当な主流派であるという印象をうけるのは、先に紹介されるからでもあり、また、反対意見に「ずいぶん大胆な仮説」とコメントがつくからだろう。

著者は、はじめは村松説のほうが有利だと思っていたが、もう一方の主張も簡単には退けられそうにないので、自分で調べ直して、「この論争に決着をつけたい」と思っていたという。そして、結果的に、「白馬岳の雪女」伝説は、まちがいがなく、ハーンの「雪女」に由来していて、雪女伝説は、その大部分が、ハーンから出たものであろうと、ほぼ確実に立証できたのである。「(二二二)」という。そして、「わたしを含めて、ハーン研究者の多くは、……だまされていた」(二二二)、「多くのハーン研究者同様、わたしも、……松谷の「雪女」が信濃の山麓で語り継がれた口承伝説を採集したものだとはかり思い込んでいた」(五〇)、と著者は繰り返す、だが結果的に、ハーン作品から、松谷までつながったことがわかって、「調べたわたし自身が、呆然としている」(五〇)と、事の重大さが強調される。

言い方も大仰だが、それにしても、著者が再三繰り返す「多くのハーン研究者」とは、いったい誰のことをい

「雪女」の「伝承」をめぐる

「雪女」の「伝承」をめぐって

うのだろうか？ 少なくとも私の知る限り、文章によって、その立場にあるといえるのは、ここに著者が挙げている村松眞一氏ただ一人だけである。

そもそも「論争」というからには、ある問題について、同レベルの場で、同程度の主張がなされ、少なくとも一回は意見の応酬がなされていなければ、論争とはいえない。著者は、相対する意見の「それぞれを代表する」ものとして、ふたつの文章のタイトルと著者名だけを同等に並べるため、双方が対等のものであると読者は錯覚する。

だが、村松の文章は地方の同人誌（静岡県焼津図書館内におかれた「小泉八雲顕彰会」が会員向けに年一回発行する『八雲』という雑誌で、総頁数はあとがきを入れて二二頁）にのせた、わずか三頁ほどのものである。

一方、ハーンの方が日本に土着して、松谷みよ子らの雪女の話になっていった、と考える研究者、ないし、それを前提にしている論は、拙論以外にも、刊行された著作、紀要論文のなかからいくらかでも拾い出すことができる。（やや煩雑になるが、事実として列記しておきたい。）

たとえば、橋正典は、『雪女の悲しみ ラファディオ・ハーン「怪談」考』⁽⁵⁾のなかで、雪女にまつわる昔話の代表的なものを『日本昔話通観』（同朋社）から拾い出してあり、『越中の民話』『信濃の民話』⁽⁶⁾に収められた「雪女」と似た話については、「昭和に入ってから集められたこれらの民話は、逆にハーンの影響を受けているのではないか」⁽⁷⁾と述べている。藤原万巳の「増殖する雪女」⁽⁸⁾は、フランスの作家ゴーチエの小説「クラリモンド（死霊の恋）」の女吸血鬼が「雪女」の造形に大きくはたらいたとする論である。かつて松谷みよ子の民話と、ハーン作品を比較してみた中田賢次は、「ラファディオ・ハーン点描 新解釈への道『雪女』のふる里」⁽⁹⁾のなか

で拙論文の概略を紹介し、「これを論破することはそれほど容易ではなからう。(そのためには)少なくとも一九〇二年以前に「雪女」に類似した民話が雪国に存在し、ハーンがそれを聞き知った可能性を証明してみせなくてはならない」と述べた。大澤隆幸は「雪女はどこから来たか」⁽¹¹⁾の中で、ハーンが『怪談』序で、雪女の話が武蔵国西多摩郡調布のある農民から聞いたと記したことについて、「序は作品の一部であるので、フィクションの可能性がないとは言えない。」と述べて、この作品がハーンと日本文化との対話のなから生まれたものであることを論じた。(なお大澤は、小泉八雲顕彰会の副会長だが、参考文献に村松の文章は記していない。)横山孝一は「雪女」をどう読むか　ハーンが創った二大妖怪について⁽¹²⁾にて、「雪女」には原話が存在しないので、雪女も、『怪談』所収の作品がなければ『妖怪大戦争』(三池崇史監督)には登場しなかつたはずだ⁽¹³⁾と述べている。その他、田中雄次「幻視の人ラフカディオ・ハーン　霊　世界の旅人」⁽¹⁴⁾も、同じ立場にたつ。

つまり、遠田が問題提起として述べたことは反対に、ハーン研究者の多くは、信州白馬岳の「雪女」の話が、ハーン作品の原話だとみなしてはいないのである。

考えてみるがいい。まったく同じ筋立て、同じ登場人物、という物語がしるされた二つのテキストがあって、間に数十年の隔たりがある。どちらが先か、どちらがどちらを真似たと思うかと、と問えば、答えは、ふつうは明白だろう。

ところが、このごく当たり前のことに目が曇ってしまう人が、一人二人遠田の主張するように、多くではない。出てきてしまうという事情が、日本で行われているハーン研究そのものの中にはある。以下のことは、自戒の念をこめて述べるのだが、森亮が『小泉八雲の再話文学』(一九八〇年)において、ハーンの再話文学の見所を、素

「雪女」の「伝承」をめぐる

朴な原話を見事な短編作品に仕立て上げたことにあるとし、それはモーパッサンやポーの作品に学んだことだと述べて以来、ハーンの再話作品の考察を試みた文章が増えた。そして原話と、表現の細部にいたるまで比べてみて、ハーンの作家的巧みさを確認するという、パターン化された結論で終わるエッセイもまた、多く出現したのである。ハーンの再話があつて、明確な原話が存在するとなると、その二つの比較という、一種の初歩的な比較文学の練習問題を解くような作業がなされてしまふわけで、「雪女」のように、原話が明らかでない場合は、それらしき「民話」をもつてきて、照らし合わせてみようとすることになる。そして、「民話」が先にあつて、それをハーンが再話した、という先入観に囚われているがゆえに、その「民話」の出所の新しささえ、気にならないということにもなるのだらう。

前述の村松の文章は、当人も註で断つているように、中田賢治がすでに記した（そしてその後いわば撤回した）文章と同じ趣旨である。すでに信州の伝説はハーンの原話ではないとする論が多く書かれているにもかかわらず、全くそれに対しては言及がなされていない。反論として書いたという意識もみられない⁽¹⁵⁾。ただ、村松の発見は、中田が用いた松谷みよ子らの「雪女」伝説より古い、巖谷小波監修の『大語園』（一九三五年）に、「山の伝説として伝えられる」（傍点筆者）越中越後国境の「白馬岳の雪女」という、ハーン「雪女」そっくりの物語が収録されていることをみつけたことにある。と同時に、村松にとって残念だったことは、『大語園』所収のその物語の出典を見落としたことであつた。「白馬岳の雪女」の最後には、はっきりと「山の伝説」と出典が記されており、最終巻末の長い文献リストのなかにも当然ながら、『山の伝説』があげられているのである。

だが村松は、『山の伝説』を書名だと思わずに、普通名詞だと勘違いした。だから、「山の伝説」として伝えられ

る」と説明したのである。それは、ハーン作品には原話があるという思い込みの強さゆえとも思えるし、また、原話があるはずだという前提にたてば、松谷みよ子の民話より古いテキストをみつけた喜びで、他のことが目に入らなくなったのかもしれない。

そして、遠田の論は、このナイーヴな勘違いを利用する形で進む。つまり、村松の勘違いにすぎない。山の伝説として、という形容を顔面通りのものに受け止め、(村松説のほうが有利ではないかと思つた理由として)こう述べるのである。「村松説には一九三五年に刊行された、巖谷小波の『大語園』という有力な証拠があり、これはハーンの「雪女」(一九〇四年)刊行以前には遡れないものの、口碑の記録としては極めて古く(傍点筆者)、また神話伝説集としても信頼できる確かな書物だからである」⁽¹⁶⁾。

だが、はたして『大語園』自体は、口碑として「白馬岳の雪女」の話を収録したといえるのだろうか。

巖谷小波が晩年に手がけ、弟子によつて完成された『大語園』全九巻は、日本、朝鮮、中国、インドの説話八千数百を、仏典、史書、中世の説話集、近世の随筆、縁起、同時代の郷土史などから集めたものである。物語は読みやすい口語体に書き直しているものの、引用書や出典の書名は必ず記されている。そして、『大語園』におさめられた「雪女」の話の特徴は、雪女の口碑として最もひろく採集されてきた民話や小話の類が収められてなく、ハーンそつくりのこの「白馬岳の雪女」だけが収録されているということである。つまり、巖谷小波という児童文学作家の監修による『大語園』そのものの趣旨が、民俗学の見地から各地のさまざまな口碑を集めることではなく、各種文献の中から物語性の強いものを選んで収録することにあつたと考えられるのではないか。

『大語園』がとりあげた青木純二「山の伝説」(一九三〇年)の中の「雪女」の話は、日本の物語として記され

「雪女」の「伝承」をめぐって

ている。それを著者（遠田）はハーンの「雪女」の翻訳と比較し、そのあまりの類似性から、ハーンの「雪女」の翻案だったと結論づける（二八）。そして青木がハーンに依拠したことを記さなかったことを、「一人のジャーナリストの剽窃、捏造といってもいいような詐欺的行為だった」（二二）とし、『大語園』では、青木の「雪女」が口語体書き直されているために（四二）、「ここから白馬岳の雪女伝説は、本当の口碑として流布しはじめ、ついには、これをハーンの原拠とする説が登場してしまふ」（三八）というのである。

また、ハーンと同型の物語が、一九三〇年青木純一『山の伝説』、一九三五年巖谷小波『大語園』、一九四一年の『信濃の伝説』、一九五七年松谷みよ子『信濃の民話』、以下、一九六二年、一九七四年二種類、一九八一年の八話になったとして、「これだけの古さを前にすれば、白馬岳の雪女伝説が、ハーンの「雪女」の原拠ではないかという説が登場したのも、無理はない」（二五）という。先の『大語園』の「雪女」の話についても、「口碑の記録としては極めて古く」と記して、その「古さ」が繰り返し強調される。

しかし、いくら「古い」といっても、一九三〇年である。ハーンの『怪談』から、すでに二十六年の月日が経過し、その間、翻訳も、翻案も、すでに刊行されているのである。

そしてここで、素朴な疑問として浮かんでくるのは、もし、著者がいうように、青木の著書が山岳伝説集としては良く読まれ、『大語園』以降、「白馬岳の雪女」は、日本古来の口碑伝説として、「巖谷小波という最高のお墨付きまで得た」（四四）というのならば、なぜ、「白馬岳の雪女」、すなわち、ハーンそっくりの「雪女」の話が、雪女伝説を扱う民俗学の文献にとりあげられていないのか、ということである。いわゆる昔話事典の類にも掲載されておらず、先に引用した民俗学者の研究でも取り上げられていないのである。それは、『大語園』のほ

とんどの読者は、この話を、必ずしも古くからの「口碑」とみなして読んではいなかったということの証左なのではないか。

三、論考に演出はいつまで許されるのか

日本における口碑としての「雪女」伝説がどのようなものだったか、民俗学の立場での見解は明快である。先に紹介した今野の著書以外でも、ほとんどが同じ意見を述べている。たとえば、千葉幹夫『全国妖怪事典』⁽¹⁷⁾の「雪女」の項では、内田邦彦『津軽口碑集』、菊地敬一『陸中の妖怪』(季刊『自然と文化』八四年秋季号)、毛利総一郎・只野淳『仙台マタギ鹿狩りの話』、日野巖『動物妖怪談譚』、藤沢衛彦『日本民俗学全集』三、佐藤義則『小国郷夜話』などの出典を明記して、ユキオナナ、ユキオナゴ、ユキジョロウの様々な民話伝説があげられているが、松谷みよ子と巖谷小波の著書は、取り上げられていない。児童文学の作家が、「民話」という形をとった作品を書いたただけだとみなされたからなのではないか。稲田浩二他編『日本昔話事典』⁽¹⁸⁾の「雪女」の項目をみて、内容はほぼ同じである。

だが著者の論では、「雪女」の口碑伝説をめぐる論考であるにもかかわらず、このような民俗学者の見解には触れていない。しかも、拙論のなかの、今野の著書への言及を含む文章を、わざわざその部分を中略して引用している。意図的に、民俗学者らの見解を無視し、隠蔽しているようにうかがえるのである。

著者が唯一言及するのは、国際日本文化研究センターの「妖怪データベース」である。論考の冒頭で、そこに

「雪女」の「伝承」をめくって

「雪女」の「伝承」をめぐって

「雪女」伝説のさまざまな形が列挙されていること、そのひとつ、「白馬岳の雪女郎」がハーンのもの「雪女」にそっくりだということを紹介する。そして、このデータベースにハーン作品「雪女」は記載されていないため、「このデータベースをもとに考察する限り、「雪女」の伝承がハーンに由来するという考えは出てこない」(一九)と断言して、「ハーン研究の立場からすると、これがそのまま鵜呑みにされて、文学研究に応用されると困ったことになるな」と心配になる(一七)というのである。

しかし、データベースの方には、それぞれの伝説の採集された年と出典の書名が明記されているので、それを見れば、「白馬岳の雪女郎」だけが、他の「雪女」にまつわる話より、随分新しい、近年のものだとわかる。民話の採集された年代を無視して考察を試みることなどないだろうし、そして何よりも、このデータベースを作成した小松和彦自身が、編著『図解雑学・日本の妖怪』(二〇〇九年)のなかで、「人間の男と情を交わすようなタイプの雪女は明治時代に東京帝国大学で教鞭をとっていたラフカディオ・ハーンが著書『怪談』の中に発表したものが最初に現れたものといつてよく、「吹雪や大雪の中に女性を見いだす日本人の感覚にハーンが感銘を受けて、当時の西洋の文学界において流行していた「宿命の女」としての雪女のモデルを創作したのではないかと考えられている。」⁽¹⁹⁾と述べているのである。だが、著者は小松のこの見解についても言及しない。

このように、「雪女」の出典問題に関するハーン研究者と民俗学者の一致した見解が、著者の論では、見事に隠蔽され、その結果、「白馬岳の雪女」がハーンのもの「雪女」の原話となったと多くの人が考えているかのような錯覚を与えているのである。なぜか。その理由は、まずは、著者自身の論の結論を引き立てるためだろう。著者の論は、ハーン作品が、青木純二『山の伝説』(一九三〇年)、巖谷小波『大語園』(一九三五年)、松谷みよ子『信

濃の民話』(一九五七年)、『鈴木サツ全昔話』(一九九三年)⁽²⁰⁾と順をおって「転生」したという展開を示すものである。文学作品から民話になった、というこの結論が想定通りのものであつては、いくら実証の過程が充実していても、迫力に欠ける。だからこそ、結論の意外性を演出するために、問題が未解決であるかのような印象操作がなされたのだろう。

ところで、著者が提示する、ハーンの「雪女」の作品定着の軌跡のなかで、興味をひくのは、「雪女」の民話化の端緒となつたと著者が主張する青木純二『山の伝説』について、朝日新聞系列の新聞記者が意図的に行つた一種の「捏造」だとされていることだろう。青木がハーンの「雪女」をタイトル、登場人物もそのままの形で、『山の伝説』にそっくり含めたことについて、著者は、「一人のジャーナリストの剽窃、捏造といつてもいいような詐欺的行為だつた。」(二二二)、青木の「悪癖」(三三二)、「伝説を捏造」(三四、三六)、「道義的にはやはり感心できない」(三五)、「引用の作法について妙にだらしない」(三七)、「彼の意図はまんまと成功してしまつた」(三八)と青木の確信的悪意を強調して非難する。

だが、「捏造」という意識が青木記者にあつたとそれほどはっきりいえるだろうか。もし著者がいうように、ハーン「雪女」は日本の民話を下敷きとしていたにちがいないと、「多くのハーン研究者」が信じ込んでいた、というのであれば、一介の地方記者ならばよけいに、ハーン「雪女」はもともと日本のどこかの民話だと信じて、ただ元に戻しただけのつもりだつたと解釈することもできよう。

そして、青木の著作が「捏造」だというならば、遠田自身の論考においても、一種の印象操作はなされていた。ここで、こういう考え方もあるかもしれない。「雪女」の話は魅力的であり、いくつかの経路で日本に根付いた

ことも事実である。遠田による『雪女』論争の設定は、その経路を明らかにする論考のなかで、話をよりひきたたせ、よりドラマティックに提示するための、ちよっとした演出にすぎない。とりたてて目くじらたてなくても良いのではないかと。

もしそのようにとらえられるならば、私は何もいうことはない。だが、内容がどれほど面白くても、情報を操作してまでの過度の演出は、学術論文として控えるべきではないかと私は考える。文学の研究はスクープでなくともいいのである。著者の論考は基本的には、これまで一般論として、「ハーン」の作品が土着化していった」とする民俗学者の見解をも、ハーンの研究者の多くの考えをも、補強し、実証するものである。松谷みよ子や鈴木サツをめぐる話はそれだけで面白い。『雪女』論争などという、世間からすればどうでもいいような、小さなコップの中の嵐をわざわざ捏造する必要はないのである。

なお、付言しておく、このような文章を書くことは、私の本意ではなかった。だが、今、ここで事実を訂正しておかなければ、著者の演出になる『雪女論争』は、検証されぬまま、ハーン研究史の一場面として、引用され、再生産され、そして、『事実』として定着してしまつたろう。そう考えて、私はこの一文を書き始めたのだが、すでに述べたように、著者の論考には、『雪女』論争の捏造よりも、もっと根深い仕掛けが潜んでいることに、気づいたのである。

四、口碑から文学作品へ、という大前提は、だれの思い込みか

ハーンの文学における「母」と「妻」

著者の論では、全体をおおう仕掛けとして、文字に記された文学作品が口承文学化するというコースをたどったことが、通常とは逆のコース、予想外の大逆転として、提示されているのである。そして、ここで、著者によって設定される大前提こそ、民衆が語り伝える口承文芸としての民話が先であり、その民話に心惹かれた知識人が採集して記録し、その民話をモチーフとして使った文芸作品が誕生するという、ひとつの図式なのである。⁽²¹⁾

「雪女」論争⁽²²⁾も、民俗学者の見解の無視も、「口碑を採集して作品化する」というこの図式を一般的な了解事項として、論の大前提に据え置くためにこそ必要だったのではないのか。

ここで、ふたたび、今野圓輔『日本怪談集 妖怪編』のなかの指摘を思い出そう。「郷土の伝説とか昔話として地元の執筆者が書いたものに、ハーンの「雪おんな」そっくりそのまま、登場人物も茂作、巳之吉、お雪といふのが少なくとも三件もあつた。明白な原作者が忘れられてしまい、話だけが伝わり語られつづけているあいだにまるで土着してしまつて、某地に伝承された世間噺、伝説あるいは昔話ふうに取りまぎれてしまう場合も想定されるのである。」

今野は、実に淡々と、さら々と述べている。そして、それもまた当然だと思つのである。大仰に驚いてみせることなどない。文学作品が口碑化していく例や、民話の伝承過程に書物が介在する例など、いくらでもあるのではないか。ちよつと思ひ浮かべただけでも、有名な毛利元就の三本の矢の話の原話はイソップ物語にあるし、浦

「雪女」の「伝承」をめぐる

「雪女」の「伝承」をめぐって

鳥物語には文学作品の千年にわたる壮大な民話伝説化の多様な形態を見ることができ(22)。また、飛騨高山の「味噌買橋」というよく知られた民話も、実は、ヨーロッパに古くから伝わるグリム兄弟の「橋の上の宝の夢」およびイギリスの「スワファムの行商人」の話が、巖谷小波などによって日本に翻訳紹介され、それを地元の小学校教師が、翻案して謄写版刷りの冊子に収めたものが発端だということが明らかにされている(23)。似たような事例は、中世ヨーロッパ、アラブ世界までみれば、もっとあるだろう。そもそも、文字による記録というものが登場して以来、書承と口承とは、相互に作用しあいながら、時をへてきたのではないか。

唯一、口碑から文字作品という一方通行の関係を想定しうるのは、文明社会が文字を持たない社会と接触し取材採集が行われたときだといえる。つまり、近代西欧が、世界を制覇していき、原始社会に近い土地で聞き取り調査を行い、文化人類学、民族学などのフィールドワークを行った、極めて限定的な時代と地域の場合だろう。だが、そういう状況下でさえ、聖書の中の物語の現地民話化の例などが知られている。

そして、いうまでもないことだが、明治以降の日本は、一方的な「採話」しか行われないような状況ではなかった。長野は、陸の孤島、絶海の孤島ではないし、そこに住まう人々は、文盲ではないのである。義務教育がゆきわたり、いや近代教育制度導入以前から世界有数の識字率を誇ってきた土地なのである。ましてや長野といえ(24)ば、教育熱心で知られるお国柄である。ハーン(25)の作品が「現地の昔話ふうに取りまぎれてしまう場合」など、ごく自然に想定されよう。

にもかかわらず、著者が強固に設定した「口碑の採集から再話作品へ」という前提としての図式が、そのまま論のなかで成立しえなかにみえるのは、この論が、ラフカディオ・ハーンという人物の再話作品をめぐる論考だ

からである。

先に、ハーン研究において、ハーンの再話作品と原話の比較研究の伝統があることを述べた。

そして、ハーンの再話と原話の関係は、三つに分類され、数の上で一番多いのは、一つめのタイプ、つまり文字テキストからの再話であると述べた。しかし、これまでのハーン研究のなかで、ハーンの再話のイメージとして一番大きく膨らんできたのは、二つめのタイプ、つまり、口承説話を聞き取って文学作品化するハーンの姿である。

ハーンは、知識階級の「高尚」な文学よりも、名もなき民衆の伝える口承の物語に心ひかれた。耳がさどく、民衆の音楽のみならず自然の音も、生活の音も敏感に聞き取り、異国の音の風景を類まれな感性で描いた。しかも片目が不自由で、日本語を読む能力に欠けるとされてきた。さらに、物語の語り手として助力する、妻セツの貢献があつた。ここに、口碑の語りに耳をすませ、書き取るハーンというイメージが定着してきたのである。さらには、「耳なし芳一」や「幽霊滝」などの場合のように、文字テキストの原話がある場合でさえ、ハーンは「本を読む、いけません。あなたの言葉でなくてはいけません。」(小泉セツ『思ひ出の記』)とわざわざ妻セツに語らせて、その声に聞き入つたのだと強調されてきた。

現地の女の語りに耳を傾ける、西洋の男の作家。このような再話の創作過程は、魅力的な一幅の絵である。だが、それはまた、オリエンタリズムとエキゾチスムに彩られた、西洋近代の民話採取の図式ともなっている。

「現地」「女」「自然」「非文字文化」「民衆」に、自分にはない価値ある何かのインスピレーションを求めるといふ、ひとつのパターンの思考であり、ときによっては、幻想に近い思い込みともなるのである。このような図式

「雪女」の「伝承」をめぐって

「雪女」の「伝承」をめぐって

が、西欧世界を脱出し、非西欧に価値を見出ししてきたことに重点をおいて語られてきたラフカディオ・ハーンという作家の研究のなかで増幅されてきた。

著者の論考は、ハーン研究という場のなかで増幅されたこの図式を、一人の農夫の話がヒントになったという「雪女」の事例にあてはめ、強化した上で、崩れるのを目の当たりにしたものだといえるかもしれない。²⁴その結果に、「私自身呆然としている」という言葉は、本人にとって、いかにその図式が強いものであったかを示すものだろう。そして、実は、この図式の残像が、著者の「雪女」解釈そのものを覆い、強く支える役割を果たしているのである。

著者は、ハーンの「雪女」とは、基本的に「母と息子の物語」「母子関係の神話化」(九八)だという。作品を特徴づけるのは、雪女に託された強烈な母性であり、「母」である雪女の化身であるおゆきという娘と夫婦になるのだから、ここには、母親と息子の禁忌的な愛の成就が秘められているという。ハーンが「長く胸底に秘めていたはずの欲望と傷跡が、驚くほど率直に、無防備に語られている」(九九)とするのである。

「雪女」という作品のなかの箕吉²⁵の母親の描写や雪女が最後に残す言葉などに、ハーンの母への思いが投影されていることを最初に指摘したのは平川祐弘氏だった(『小泉八雲 西洋脱出の夢』、一九八一年)。つづいて仙北谷晃一氏は、浦島伝説に関するハーンのエッセイ「夏の日の夢」のなかに、幼時に別れた母への思慕を読み取り、解釈の要とした。²⁶

母を捨てた父を憎み、幼時に別れた母を慕う。ハーンの幼児体験を重視する作品論は、その後も多く書かれたが、母がギリシャの島の娘で、父が島に駐屯した英国軍医だったことから、平川祐弘氏はそこに、近代西欧世界

と非西欧世界、知識人の文字文化と庶民の口承文芸の対立を重ね、その対立の構図をより鮮明に受け継いだのが西成彦による一連の作品論だった(『ラファディオ・ハーンの耳』⁽²⁷⁾)。ハーンのいわば個人神話を投影させ、母との関係を主軸におく作品解釈は、ハーン研究の王道であったといえる。そして、今ひとつ、これまでのハーン研究の主流として指摘できるのは、妻セツの存在の重視である。すでに指摘したように、セツ自身の回想録『思い出の記』の記述の影響もあって、ハーンの再話文学の創作において、セツがインフォーマントとして、また、民話の語り部として果たしてきた役割が大きくクローズアップされてきた。平川祐弘氏は、さらに、ハーンが妻に「ちいさいかわいいママさま」とあてた、たどたどしい「へるんさん言葉」による手紙の魅力を示して、ハーンが妻に子供のように甘える姿を、つまり、妻と母が重なりあう可能性を示唆した。西成彦が「女たち」の声に耳を傾けるハーンの文学について論じた(『耳の悦楽 ラファディオ・ハーンと女たち』⁽²⁸⁾)のも、この延長上にあるといえる。

「雪女」のなかに、母との近親相姦の願望をよみとる、遠田氏の解釈は、母と妻の存在を重視する、これまでのこのようなハーン解釈の王道を、さらに極端にまで推し進めたものだといえよう。そして、ここでは、この異常なほどの母性重視と、いわば対になっているのが、女なし女に準じる存在による口碑から文学へ、という虚構の枠組みなのではないか。再話作品における「母」の面影の絶対性と、再話文学の創作現場における「妻」の役割の主導性は、いわば、表裏一体の関係にあるからである。だからこそ、この枠組みの強力な設定とその残像が、無理にでも必要だったのではないか。

ところで、「雪女」というハーンの商品の受容と定着について考えると、著者によるハーンの「雪女」の作品

「雪女」の「伝承」をめぐる

「雪女」の「伝承」をめぐる

解釈に関連して、興味深いことが指摘できる。

著者によれば、松谷みよ子の再話の特徴は、母子関係のかわりに、「徹底的に茂作・箕吉の父子関係に焦点をあてている」(九七)ことだという。さらに鈴木サツの語る「雪おな」の話では、「ハーンの母性愛にあふれ、強烈な個性と欲望をそなえた全能の女神は、その忘れたい仕事と言葉の大部分を失い」「墨で描かれたような淡色のシルエットのまま、立ち去り消える」(一一八)そして、箕吉の母親への言及さえなくなっているのだという。

では、ハーンの「雪女」はなぜ日本に民話として土着したのか。人々は、この物語のどこに魅力を感じて、受容したのか。少なくとも、松谷みよ子と鈴木サツは、「失われた母への愛」を「雪女」という物語の根幹をなすものと考えはしなかった。ハーンの「雪女」が日本に土着していく過程で、人々が消すことをしなかったもの、それは、母性や、母親と息子の禁忌的な愛とは、別のところにあつたということになるのではないだろうか。

母への思慕は、たしかにハーンの文学を通底する、ひとつの魅力的なモチーフである。だが、ハーンの創作過程において女性のはたす役割を過大にとらえ、作品内に母や妻との関係、男女関係の意味を過剰にのみとり、そこにハーンの本質を帰結させることは、むしろハーンの文学そのもののもつ意味を小さくするのではないかと私は思う。しかし、この問題は、本論の枠を超えるものであるので、これ以上は述べない。ハーンの文学における「母」「妻」「女性」の意味についても、稿をあらためて論じるべきものと考ええる。

〔注〕

(1) たとえば、文書にしろされたもつとも古い部類としてあげられている、室町末期の旅の連歌師、宗祇法師(一四二一—一五〇二)の『宗祇諸国物語』(一六八五)の序文にのっているという次の話はこの第一のタイプである。宗祇法師が越後国にいた頃、二月のある夜明け方にふと遣り戸を開けて東の方を見ると、向ここの竹藪の端に、顔から肌まで透き通るくらいに白い、すなりとした怪しい女が、白い単衣の着物を着て立っていたが、やがて静かに歩くとみるまに消え失せた。それが大雪などの際にまれに現れる雪の精で、俗に雪女というものだと後で人に聞いたという話である。柳田国男の『遠野物語』の記す雪女の伝説も冬の満月の夜には雪女がでるからといって子供達に帰毛を促すというものである。

(2) 吹雪で倒れた者の靈魂が出てくる幽霊話風のもの、近松門左衛門の『雪女五枚羽子板』などのような浄瑠璃にみられるという。

(3) 成城大学『経済研究』一〇五号、一九八九年七月、平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』講談社学術文庫、一九九二年、所収)

(4) 中田賢治『雪女』小考、『へるん』一九号、昭和五七年

同、『雪女』小考(つづき)、『同』二〇号、昭和五八年

なお、氏のあげる原話は次の三点である。

瀬川拓男・松谷みよ子共編『日本の民話—自然の精霊』角川書店、昭和四八年

『信濃の民話』編集委員会編『信濃の民話』未来社、昭和四九年

和歌森太郎・二反長半共編『日本伝説傑作選』第三文明社、昭和四九年

(5) 国書刊行会、一九九三年—

『雪女』の『伝承』をめぐって

「雪女」の「伝承」をめぐって

- (6) 未来社
- (7) 国書刊行会、一三二頁
- (8) 『続ラフカディオ・ハーン再考』熊本大学小泉八雲研究会編、恒文社、一九九九年
- (9) 『へるん』三七号、二〇〇〇年
- (10) 同、四八頁
- (11) 静岡県立大学『国際関係・比較文化研究』四(一)、六九 八六頁、二〇〇五年九月
- (12) 『へるん』第四三号、二四 二七頁、二〇〇六年。「ラフカディオ・ハーンの「雪女」ができるまで 夢の中の母」『実像への挑戦 英米文学研究』欧米言語文化学会編(音羽書房鶴見書店)、二〇〇九年、として再録
- (13) 同、一四頁
- (14) 熊本大学社会文化科学研究科文化政策論分野編『二一世紀に再考するラフカディオ・ハーン』、二〇〇五年三月
一 一九頁
- (15) 一般に「論争」の内容を理解するためには、発言の順序や経緯も重要だと思われるが、遠田には、村松の短文が掲載された雑誌の平成一〇年という発行年を、脚注にさえ記していない。
- (16) 読者は、直前に、村松の「山の伝説として伝えられる越中越後国境の白馬岳の雪女」の話という前置きを読者は読んでいたため、著者のこの説明を何の疑いもなく受け入れてしまい、口碑の伝説を直接記録したものととして、『大語園』に記されていると受け止めてしまっているのではないか。
- (17) 小学館ライブラリー、小学館、一九九五年
- (18) 稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂、昭和五二年
- (19) 『図解雑学 日本の妖怪』ナツメ社、二〇〇九年、一一四頁

(20) 著者の示す「転生」の順番で最後にくる、遠野の鈴木サツの「雪女の話」(『鈴木サツ全昔話』一九九三年)は鈴木の話りを記録したものである。方言による鈴木の話り直しは、それ以前の松谷らの再話と異なり、「過去の言語とその表象・象徴世界への逆行だった。」と著者は言い、「こうして「雪女」は、遠野の昔話になったのである。」と結ぶ。

だが、遠野の民話の語り部が、官民一体の観光事業の一環として行われていることは周知の通りで、そのなかで、特に語りの芸に秀でた現代人が、「遠野の昔話として」観客のために語ってみせたとしても、それで「雪女」が遠野の昔話となったとはいえないのではないかという疑問は残る。

鈴木本人が述べているように、「雪女」は、「昔話かたるようになってから人に教えられた話」(一二四)だった。鈴木に語りの題材として「雪女」の話を読んだのは、かかりつけの遠野の医師だったのだが、そのことについて、「(医師の)佐々木がどこでこの話を知ったのかは推定するしかないが、多忙な町医者という職業を考えれば、ごくありふれた一般的な書物で読んだと考えるべきだろう。だとすれば、それは松谷の「民話」であった可能性がもっとも高い」(一二五)と著者は述べて、松谷みよ子の童話から、遠野の昔話になった、という道筋をつける。だが、町医者であるという、それだけの理由で、ハーン作品を直接読んでいない、と断定できるだろうか。鈴木「雪女の話」では、最後に雪女が正体を現す場面が、「あの時も、こなたな晩げだったな」というせりふで始まる。それは物語としての「雪女」のクライマックスなのだが、この言葉はまた、ハーン作品の「持田の百姓」の最後の重要なせりふをも連想させる一句である。佐々木がハーン作品の怪談集などを読んでいる可能性も否めない。

そして、ここで考えてしまうのは、青木純一の『山の伝説』がなくて、松谷みよ子の童話がなかったと仮定して、その場合、ハーン「雪女」の話は、日本人の間に広く知られることはなかったか、魅力を見出されることなく、消えていただろうか、ということである。たとえば、「むじな」、「耳なし芳一」の話は「雪女」と同じように日本に定

「雪女」の「伝承」をめぐって

「雪女」の「伝承」をめぐる

着しているが、青木純二や松谷みよ子に相当する、確信的媒介者の存在は見つかっていない。「雪女」の場合、もし、ハーンの作品が消えてしまえば、松谷みよ子バージョンが人々の間に定着したのなら、別である。だが、現代において、「雪女」はやはり、ハーンの「雪女」なのではないだろうか。松谷みよ子と遠野の鈴木サツの場合も、むしろ独立した、それぞれ別のハーン作品受容の物語と考えられるのではないのか。

民話の分野ではないが、たとえば、俳人の真鍋呉夫に『雪女』（平成四年、読売文学賞を受賞）という題の句集があり、次の『月魄（つきしろ）』（第四十四回蛇笏賞）でも雪女を詠んだ句が数多く含まれているが、大正九年生まれの真鍋は、『対談 「雪女」を語る』（『俳句界』〇九・一二）のなかで、少年時代に読んだラフカディオ・ハーンの「雪女」が意識の潜在にあることを述べている。これはほんの一例だろうが、読書の記憶はさまざまな形で、広がっていくものなのである。

(21) さらに言えば、ハーンの作品、つまり西洋の要素が民衆の口碑に溶け込んで土着の民話となることを「大胆な仮説」とするのは、逆に、西洋からの影響は、知識階級の青年子女の憧れや流行として取り入れられるのだという、これも一つの図式を前提にした考えかたといえる。「雪女」の事例は、異なる文化圏の想像力の流入と定着は、知識階級／民衆、文字テキスト／口碑といった別を超えて、柔軟かつ双方向にはたらくのだということ、あらためて知らしめるのではないだろうか。

(22) 三浦佑之『浦島太郎の文学史』、五柳書院、一九八九年

(23) 杉田英明「橋の上の宝の夢」(『葡萄樹の見える回廊』岩波書店、二〇〇二年)。柳田国男の指摘に始まり、伝播経路を明らかにした櫻井美紀までの、研究のあらましがまとめられている。

(24) 「雪女」の事例が興味深いのは、ハーンの作品としての「雪女」が幅広い読者をへて、日本の土壌にひとつの民話として「土着」したことで、ハーン研究の枠を飛び出たことである。ハーンの再話過程の図式に必ずしもと

らわれない民俗学研究の場では、従って、松谷みよ子らの「雪女」の話を日本古来の口碑、つまりハーンの話とみなすことはなかった。

(25) 「みのぎち」の表記は、翻訳によって、蓑吉 巳之吉などまちまちである。

(26) 仙北谷晃一「ハーンと浦島伝説 『夏の日の夢』の幻」『人生の教師 ラフカディオ・ハーン』恒文社、一九九六年

(27) 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』岩波書店、一九九三年

(28) 西成彦『耳の悦楽 ラフカディオ・ハーンと女たち』紀伊國屋書店、二〇〇四年